平成 28 年度大学職員情報化研究講習会～基礎講習コース～

F 班 3 グループ
グループ名：ぼっち

１．背景

① 大学の役割

■私たちが考えた大学の役割
・グローバル化に対応する
・地域貢献
・人材育成
　→質の高いサービスの提供
・研究と成果の発信

■役割を果たすために、大学がすべきこと
・社会で活躍できる学生の輩出

② 大学の現状

社会のニーズに応えるために、大学では主体性を持った学生の育成に注力しているが、社会人になる際に、主体性をもって行動することができる学生とできない学生がいる。
ここで私たちが考える主体性を持って行動できない学生とは、受動的な「目標がない学生」、または、自分が何に興味があり、何が向いているかがわからない「自分を知らない学生」を定義する。

現状を打破するための対策として、私たちは主体性をもって行動することができない学生のサポートを行う必要があると考えた。

③ 問題点の深堀

IT の発達、SNS の普及等による社会の変化により、人とコミュニケーションをとることが苦手な学生が増加傾向にある。コミュニケーションがうまくとれない学生や他人との共同作業が苦手な学生は、課された課題に対し、目的を達成するための難易度が上がってしまう。そこで、失敗を経験し失敗を恐れてしまうと、結果として自分に自信を持てなくなる。解決策として、発言することが苦手な学生が、授業で意見を発信してもらうために、授業で Twitter を用いて発言してもらうという仕組みを取り入れている大学もある。
しかし、上記の対応は短期で見れば有効な処置であるが、学生が抱える問題の根本的な解決策ではない。

根本的な解決策として、自分の居場所を見つける手伝いを大学全体で取り組む必要があり、最初の 1 歩として、大学で誰かと話ができる環境を設け、充実した大学生活を送れる

ようにサポートすることが重要であると考えた。

④ 解決策の検討

以上のことから、私たちは目標がない、自分を知らない学生をサポートする取り組みが必要であると考え、どのような取り組みが効果的か具体的に考察を行った。

・教員の意識改革

学生の立場からすると、一番身近な存在であるのは、教員であると考える。

そのため、「主体性のない学生が多く存在し、その学生たちをサポートする必要がある」という現状を教員にも理解してもらう必要がある。また、該当の学生たちを教員にもサポートしてもらうために、教員にメンタルケアについて知識を深めてもらう必要があると考えた。

・職員の役割

a) サポートセンターの設置

→学生の話し相手の場となる場所

b) 協同体験型の授業に職員も参加

c) 職員の意識改革

d) 情報の発信

・解決策実現のためのハードルとその打開策

私たちの考える取り組みに対し、一番のポイントは教職員で取り組んでいくことが必要である。

教員の協力を得るためにも、大学の退学者や休学者、また、メンタルケアが必要な学生を数値化した資料を提示し、学生をサポートする必要性を教員に理解してもらう必要がある。

２．イノベーションの提案

以上を踏まえたうえで、下記を提案する。

■テーマ

One Up ~主体性をもった社会人になるために～

■概要

主体性がない学生のサポート

■問題点

主体性がない学生は目標がない、または、自分を知らない学生が多く、将来の退学者となってしまう傾向がある。学生が退学してしまうことは、学生と大学にとって最悪の結果である。主体性がない学生が充実した大学生活を過ごせるための環境づくりが必要である。

■アプローチ

解決する策として以下の項目を挙げた。

・なんでもサポートセンターの設置

→教員、職員、学生が相談を受ける相談室を設置する。総合案内の役割を担う。また、悩みや問題を抱えている学生が気軽に相談できる窓口を設置し、学生と一緒になって悩みや問題の解決に努める。行動を共にすることにより、「独りじゃない」ということを学生に実感してもらうことで、大学に自分の居場所を確保できるようにサポートする。

・協同体験型の授業(課外授業やボランティア等)の必修と職員の参加

自分に自信がない学生は、友達が少ない傾向にある。グループ内で協議した結果、行動を共にし、同じ体験をした学生同士は友達になりやすいという結論に至ったため、協同体験型の授業を必須にすることを提案する。また、協同体験型の授業に職員も参加することで、教員とは別の視点から学生を監視・サポートを行う。授業開始前に、自分に自信がない学生の情報を教員と共有し、対象の学生が友達を作れるきっかけの場を教職員で作ってあげることを目的とする。

以上より、退学者予備軍となってしまう、主体性がない学生に 1 人でも多くの友達ができることを図る。
友達ができることで、充実した大学生活を過ごすための第 1 歩に繋げる。
第 1 歩を踏み出した後も、サポートセンターの担当者や教職員が成長を見届け、間違った

道に逸れてしまわないよう誘導し、主体性を持った学生として社会に羽ばたいていくことを最終目標とする。

■到達点

上記の提案を実行した場合の達成点としては、前年度より退学者・休学者の人数が減少していることを挙げる。また、サポートセンターに利用状況や成果、学生の大学生活満足度に関するアンケートを実施することで、さらなる学生のサポートに努めていく。
その一環で ICT を利用し、学生カルテやポータルを利用し、情報共有、現状分析を行う。

３．総括

ICT に関するセミナーであったため、当初は ICT に注目しがちであった。
グループで討論することにより、別の視点から大学の現状とあるべき姿について考えることができた。
時代に合わせて ICT を導入するのではなく、学生のことを考えて、学生が充実した大学生活を送るための 1 つのツールとして、ICT を活用することが大事であるということを改めて実感する良い機会であった。今後も「本当に学生の為になるのか？」ということを念頭に置いて、業務遂行することで、1 人でも多くの学生が充実した大学生活を送れるように努める。